



*KanColle  
Memorial*

*Haruna after  
omnibus*

艦これメモリアル  
- 榛名 after 総集編 -

ひーらぎ

after1 真冬のセレナーデ【06P】

after2 榛名がドレスに着替えたら【52】

after3 榛名先生がお相手しましょう！【98】

あとがき【148】

## 〈登場人物〉

### 【提督<sup>ていとく</sup>】

東京から鎮守府島へやってきた高校2年生の男子。  
鎮守府学園高等部2年1組に在籍することになる。  
島の人間からは何となく雰囲気<sup>ふんいき</sup>がそれっぽい、とい  
う理由「提督」と呼ばれている。  
しかし本名とは全くかぶっていない。

### 【榛名<sup>はるな</sup>】

鎮守府学園高等部2年1組のクラス委員長を勤  
めている。  
真面目でおしとやか、それでいて頑張り屋の明る  
い女の子。  
金剛、比叡、霧島との姉妹仲はもちろん、学園で  
も友達が多い。  
「榛名は大丈夫です」と事あるごとに口にする。

<sup>こんごう</sup>  
【金剛】

鎮守府大学1年生で金剛型1番艦という名の長女。  
島で一番人気の女子だが、過去に彼氏を作った経験は無い。

姉妹とのスキンシップとティータイムを何より大事にしている大人な女性。

<sup>ひえい</sup>  
【比叡】

鎮守府学園高等部3年生であり水泳部部长。金剛型2番艦という名の次女。

後輩を導くいい先輩でありながら、幼馴染のような距離の近さがあり同性からの人気も高い。

<sup>きりしま</sup>  
【霧島】

鎮守府学園高等部2年2組クラス委員長。金剛型4番艦という名の四女。

頭脳明晰でデータを元に動くインテリクラス委員長。と思いきや、絶対に怒らせてはいけない高等部の番長という側面があるという噂。

クールビューティーなルックスから男女問わず人気が高い。

【榛名先生がお相手しましょう！】

1

「ではそろそろ始めましょうか」

僕らしか居ないプールへ榛名の声が遠く響いた。

八月。

水平線の彼方まで届きそうなセミの鳴き声と目眩がしそうな暑さが続く夏休みだ。

高校三年の僕らにとってこの時期にするべきことただ一つ！

受験勉強であって、

「榛名が……いえ、榛名先生がしっかり泳ぎ方を教えて差し上げますからね！ 今日だけの補修ですけど頑張りましょう！」

決して二人きりの補修をすることじゃない。

そんな僕のテンションとは裏腹に、学校指定のスク水ではなく競泳水着姿の榛名は楽しそうに目元を緩ませていた。

普段はかけてない赤いフレームのメガネを指で持ち上げる姿は先生っぽさを感じさせるのに十分な気がした。そして髪型も後ろで束ねてポニーテールにしてるし……。

何というか、僕の趣味がバレたようなそんな気持ちになる。

「補修が嫌なのはわかりますが、これも大事なことなので。一緒に頑張りましょうね。いっぱい頑張ったら帰りにご褒美あげちゃいます」

ふふ、楽しいげな目元から飛ばされるウインクに胸がドキンと弾んだ。

補修も悪くないかもしれない……。

だってピツタリ肌へ競泳水着がフィットしていて、身体のラインだったり両手から溢れるくらい大きい胸の形だったり、股関節から伸びる太くもなく細くもない。触れれば心地よく指が沈んで支える太ももが丸見えなんだ。

「よっしゃ、頑張るぞ！」

「はい。榛名先生、頑張る提督が大好きですよ」

これで嫌になる男がいるだろうか？ いや、まずいない！  
でもどうして先生なんだ？

「そういえばなんで榛名が補修見てくれるの？」

榛名は僕と同じ高校三年生。

そもそもの話、補修を見るなら誰かしら先生のはずなんだけど……。

だだっ広いプールの奥。僕らがいる反対側の出入り口から誰かやってくる気配もない。

「えっと……」

榛名が困ったように眉根を寄せた。

「本当は足柄先生の予定だったみたいなのですが……。少しお忙しいようで、クラス委員の榛名が代わりに補修をすることになったんです。提督とお付き合ひしてる私なら問題ないだろうって」

「だから榛名先生なのか。足柄先生より楽しそうだからいいけどさ」  
何より競泳水着姿を見ることができたんだから。

確か授業の時は水泳部以外学校指定のスク水を着てたはずだ。身体へフィットしてボディラインをしっかりと浮かび上がらせる点では同じだけど、競泳水着は布面積が少な  
くて――。

不思議なエロさが醸し出されてる気がする。

こんな姿で泳ぐって、足広げたときとか見えたりしないのかな……。

だって股関節部分からもう布がないのよ？ 少しでもズレたらアウトなきわどいライ  
ンなのに……。



榛名は恥ずかしくないのかな？

ん？ 恥ずかしいところ……？

「提督？」

「うえっ!？」

「だ、大丈夫ですか？ お顔が真っ赤ですよ？」

「な、夏だからな！ 室内でも暑いなーって」

あ、あははは。

わざとらしく笑うけど、小首を傾げる榛名を誤魔化すことはできなかつたらしい。すぐに僕の顔へ近づいて、そっと額へ手を当てられる。

ヒヤッとした感覚に驚いて変な声が出そうになる。

「体調悪いまま泳いだら余計具合悪くなってしまうですよ？ でも……」

「で、でも？」

「ちよっとごめんなさい」

「ん？ ああ」

返事した途端、額の手が離されて――。

「ちよっと榛名さん？」

これから補修なのに何しようとしてるのさ!?

薄目を閉じて近づく顔にいつものように唇が自然に動くけど、榛名の唇と中々重ならない。代わりに人肌の温もりが優しく触れて、

「熱はないみたいですね。提督、本当に大丈夫ですか？」

おでこをくつつけたまま細い声で言われる。

背伸びをした榛名と吐息が行き交う距離に、自分の顔がより赤くなった気がした。

「おでこが熱くなってますけど……。お腹痛いですか？ それとも吐き気ですか？ 具

合悪いなら先生にちゃんと伝えておきますよ？」

「体調は本当に平気なんだ。でもまあ……」

僕の視線がピタリくっついてる胸元へ下がる。

競泳水着越しに膨らんでいたものが押し潰れるようになってきた。見ているだけで柔らかさが伝わってくる。

「し、失礼しました……」

「い、いや僕こそ……ごめん。補修の時に」

赤い顔で一步下がったがレンズ越しに潤む両目は変わらず僕を見つめている。

「で、でも……。榛名でドキドキしてくれたってことですよね？」

「……う、うん」

「なら、大丈夫です」

まだ赤い顔ではにかんだ。

釣られて僕も同じように笑うと、何か思いついたような顔で首を斜めにする。

「提督、競泳水着がお好きなんですか？」

「はい!？」

「だ、だって……榛名の声が聞こえなくなるほど見つめていたってことですよね？」

「そ、そうだけど」

改めて確認されるように言われると恥ずかしさで顔がまた熱くなる。

しかし榛名はすっかり好奇心の虜なのか、言葉を止めない。

「この水着、比叡お姉さまに借りたものなのですが……。榛名、雑誌で読んだことあります。男の方は競泳水着がお好きだって……」

「どんな本だよ!」

「ご、ごめんなさい。でも……気になってしまっただけ」

「い、いや。僕も急に大きな声でごめん。確かに好きだけど……水着だけじゃなくて。メガネとかポニーテールとか……。いつもと違うところが多くて。可愛いなって……」

恥ずかしさの波に流され、目を逸らすように視線を下げてみる。だが、榛名の両手が僕の顔を支えるように持ち上げた。

「ではちゃんと榛名のこと見てくれますか？」

「えっと……」

「メガネはお好きですか？」

「うん……」

「ポニーテールも？」

「うん……」

「では、今日だけじゃなくて今度もメガネとポニーテールやりますね」

どんな言葉で例えれば正しいのかわからないけど、見慣れている笑顔がメガネのせい  
で、大人な女性の余裕を感じさせた。

しかしそんな時間はいつまでも続くわけではない。

「では……そろそろ補修始めますよ？」

そつと僕の頬から手を離れたかと思えば、両手を組んで真っ直ぐ伸びをした。そのままつま先を触るように身体を折り曲げて、今度は大きく背中を反らせる。

ぷるんと弾む胸に意識が行きそうになるのを必死に堪えて僕もストレッチに入る。

身体が温まり、筋肉がほぐれていくのをただ脳内でイメージする。そうすれば、頭の中の煩惱も一緒に解消される気がするんだ。

そう信じているんだけど、

「私も手伝いますよ」

ふいに聞こえた声に、遠ざかろうとしていた煩惱がダッシュで戻ってきた。その速度はオリンピックで金メダルが取れるくらいの勢いだったと思う。

「い、いや。大丈夫だよ」

「遠慮はいりませんよ？ 今日の榛名は心を鬼にして！ 提督に泳ぎを教えるんです。提督が卒業できずに後輩になるのは嫌ですから、そのためです」

「僕だってもう一年高校生やるのは……」

この島に同年代の男なんていない。全年代合わせても男の数が本当に少ないんだ。

つまり、誰が何をしたかなんてすぐ噂になるし特定される環境というわけだ。高校留年なんて笑いのネタになるだろうし、何としても避けたい。

それを心配してくれるし、補修を見てくれる相手として一番理想なのかもしれない。

「今日の榛名ってなんか先生みたいだ。榛名先生」

「そうですよ。先生は厳しいんですよ？」

「優しくして……」

「うーん、どうしましょう」

ふふ、楽しみに笑う榛名がメガネを押し上げた。

「では愛を持って厳しくします。厳しさもまた優しさですからね。まずは足を広げて座りましょうか」

指示されるがまま、プールを正面に見るように足を広げて座る。

「それじゃあ背中押しますね」

肩へゆっくりと榛名の体重がかかり、身体が前へ倒れていく。普段全然ストレッチなんてしないから最初は気持ちよかったけど、

「ちよ、痛い痛いストツプ!!」

まだ半分もいってないのにある一定のラインを超えた瞬間、股関節が悲鳴を上げた。背中を押す力は弱まるどころか強くなってる気がする。

「提督、身体固いですね。あともう少しがんばってください!」

「無茶だつて。足外れるから」

「そんな簡単には外れませんよ」

「ああダメだつて……おほっ」

「て、提督？」

「い、いや……つ、続けてくれ」

今の感触――。

もしかしてだけど、やっぱりそうだよな？

「よいしょっ」

耳元をくすぐる声と一緒に背中へクッションみたいなのが触れた。それに意識が向いたせいか足の痛みが遠のいていくようだ。

半身で振り返ると、息を切らせた榛名の横顔が映る。

「痛いですか？」

「い、いや……もっと続けて。強く押しているから」

「ふふ、さっきまで足が外れるなんて言ってたのに。急にどうしたんですか？」

「溺れないように、かな」

「いい心がけです。榛名先生、関心しましたよ」

それでは――。

背中の柔らかさがさつき以上に押し付けられているのがわかる。まるで僕の背中の一  
分になるんじゃないかってほどだ。

時折耳をくすぐる甘い吐息も合わさって、控えめに言って至福の時間だ。

「ああ……やばい」

「ん、強く押しすぎましたか？ でももうおしまいですからね。あまりやりすぎると今度は身体を痛めてしまいますから」

なんとも複雑な心境は榛名の胸が遠ざかっている寂しさなのか、理性が飛ばなかった自分の情けなさを示しているのか……。

一人溜息すると、

「はい、それでは水の中に入っていきますよ」  
すぐ正面で榛名が僕へ手を差し伸べていた。





『よろづ屋本舗』  
明暗異色のライトノベル販売サークル

艦これメモリアル  
- 榛名 after 総集編 -

ひーらぎ

**C96 コミックマーケットで頒布予定！！**

『よろづ屋本舗』



<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

本やサンプルの感想、ご意見等も歓迎です！  
ホームページや著者の Twitter 等に送っていただければ幸いです！

サークル代表：黒ねこ作 (@gretelproject)

# 艦これメモリアル

## － 榛名 after 総集編 －

発行者：よろづ屋本舗

HP：<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

Email：[yoroduyahonpo@gmail.com](mailto:yoroduyahonpo@gmail.com)

著者：ひーらぎ (@rag0311)

Email：[hi\\_ragi0311@yahoo.co.jp](mailto:hi_ragi0311@yahoo.co.jp)

装丁デザイン：むへどるり (@muhedoruri)

編集：黒ねこ作 (@gretelproject)

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。